

『太平經鈔』丁部卷之四 (4/3b/2～4/4b/1)

二〇二〇年九月二十六日

担当 張 名揚

〔原文〕一

天地之間、常悉使非其能、強作其所不及、而難其所不能。時觀於〔其〕不能為  
(一)、不能言、不憐而教之、反就責之、使〔其〕冤結(二)、多忿爭訟。民愁苦困窮、  
即〔而〕仰〔仰而〕呼〔皇〕天(三)。誠冤〔結氣〕〔誠冤〕(四)。(氣)感動六方(五)、  
故致災變紛紛。畜積非一、不可卒除。為害甚〔甚〕(六)。是即〔告〕〔失〕(七)天下  
之人心意矣。終反無成功、變怪不絕。太平之氣何從得來哉？故不能致太平〔氣〕  
〔也〕(八)。答正在此。

〔校勘〕一 『太平經』卷之五十四 「使能無爭訟法第八十一」

- (一) 【時觀於不能為】『太平經』(以下「經」と略称)では「時觀於其不能為」に作る。「經に従う」
- (二) 【使冤結】経は「使其冤結」に作る。「經に従う」
- (三) 【即而仰呼天】経は「即仰而呼皇天」に作る。「經に従う」
- (四) 【誠冤結氣】経は「誠冤誠冤」に作る。「經に従う」
- (五) 【感動六方】経は「氣感動六方」に作る。「經に従う」
- (六) 【甚】経は「甚甚」に作る。
- (七) 【告】経は「失」に作る。「經に従う」
- (八) 【氣】経は「也」に作る。

〔訓読〕一

ざるをして

天地の間、常に悉く其の能に非ずして、強いて其の及ばざる所を作さしめ、その能はざる所を難ず。時に其の為すこと能わず、言うこと能わざるを觀て、怜れみて之に教えずして反つて就きて之を責め、其の冤を結ばしめ、忿り多く争訟せしむ。民、愁苦にして困窮すれば、即ち仰ぎて皇天を呼ぶ。誠に冤なるかな、誠に冤なるかな。氣、六方を感動するが故に災變紛紛たるを致す。畜積して一に非ずして、卒に除くべからず。害を為すこと甚だし。是れ即ち天下の人の心意を失うなり。終に反つて成功無くして變怪絶えず。太平の氣、何從(いづくんぞ)來たるを得んや？故に太平の氣を致すこと能わず。答、正に此に在り。

なにより

〔現代語訳〕一

天地の間では、いつも（起こるのは、）能力のないものに、無理やりその能力の及ばないことをさせ、そのできないことを非難する。時にそのできないこと・答えられないことを見ては、憐れみもせず教えもせず、かえってそれについて責め、怨みを抱かせ、ひどく怒らせて争ったり訴えたりさせる。民が愁い苦しんで困窮すると、天を仰ぎ皇天を呼んでしまう。誠に怨みではないだろうか、誠に怨みではないだろうか。（この怨みの）氣が六方（東・西・南・北・上・下）を震撼させるので、災いと異変が入り乱れる。（怨みの氣が）積み重なって止まず、ついに除去できなくなってしまう。これによってもたらされた害は甚大なものだ。そこで天下の人々の心を失ってしまうのだ。ついにかえって成功を収められず、絶えず異変が生じてしまう。太平の氣がどうしてやってくるであろうか（いや、やってくるはずがない。）だから太平の氣を到来させることができないのだ。その過失は、外ならぬここにある。

何処より

かんたんには

〔注釈〕一

○冤結

『後漢書』卷一「光武帝紀」

久旱傷麥、秋種未下、朕甚憂之。將殘吏未勝、獄多冤結、元元愁恨、感動天氣乎。

『後漢書』卷三十「襄楷伝」

臣伏見太白北入數日、復出東方、其占當有大兵、中國弱、四夷彊。臣又推步、熒惑今當出而潛、必有陰謀。皆由獄多冤結、忠臣被戮。德星所以久守執法、亦為此也。

『後漢書』卷七十二「董卓伝」

明年夏、大雨晝夜二十餘日、漂沒人庶、又風如冬時。帝使御史裴茂訊詔獄、原繫者二百餘人。其中有為催所枉繫者、催恐茂赦之、乃表奏茂擅出囚徒、疑有姦故、請收之。詔曰、災異屢降、陰雨為害、使者銜命宣布恩澤、原解輕微、庶合天心。欲釋冤結而復罪之乎。一切勿問。

『太平經』卷六七「六罪十治訣第一百三」

愛之反常怒喜、不肯力以周窮救急、令使萬家之絕、春無以種、秋無以收、其冤結悉仰呼天。天爲之感、地爲之動、不助君子周窮救急、爲天地之間大不仁人。

○争訟

『後漢書』卷四九「仲長統伝」所収「法誠篇」

舉用失賢、百姓不安、爭訟不息、天地多變、人物多妖、然後可以分此罪矣。

『太平經』卷一一六「某訣第二百四」

今太平氣至、乃天與神兵共治、故斷刑罰兵杖爭訟、令使察察、萬世不復妄也。

○皇天

『太平經』卷一一七「天樂得善人文付火君訣第二百七」

夫皇天、乃是凡事之長、人之父母也、天下聖賢所取象也。

○太平氣

『太平經』卷四十八「三合相通訣第六十五」

太者、大也。平者、正也。氣者、主養以通和也。得此以治、太平而和、且大正也、故言太平氣至也。

〔原文〕二

〔天下〕萬物<sup>(二)</sup>各自有宜。當任其所長、所能為、所不能為者、而不可強也。萬物〔雖〕俱〔愛〕〔受〕陰陽之氣<sup>(三)</sup>、比若〔莫〕〔魚〕不能〔無水〕<sup>(四)</sup>〔遊〕〔游於〕<sup>(五)</sup>高山之上、及其有水、〔不限〕〔無有〕<sup>(六)</sup>高下、皆能〔去矣〕〔游往〕<sup>(七)</sup>、大木不能無〔上〕〔土〕<sup>(八)</sup>、生於江海之中。是以古者聖人明王之〔受〕〔授〕<sup>(九)</sup>事也、五土各取其〔所〕宜<sup>(十)</sup>、〔迺〕其物<sup>(十一)</sup>得好且善、而各暢茂。國家〔為其〕得富<sup>(十二)</sup>、令宗廟重味〔食之〕〔而食〕<sup>(十三)</sup>、天下安平無〔所〕疾苦<sup>(十四)</sup>、惡氣休止、不行〔而〕為害<sup>(十五)</sup>。如人不〔卜〕相其土地而種〔植〕之<sup>(十六)</sup>、〔即〕〔則〕<sup>(十七)</sup>萬物不〔得成〕竟〔其〕天年<sup>(十八)</sup>皆〔壞〕〔懷〕<sup>(十九)</sup>。冤結不解、因而天終、〔獨〕上感〔動〕皇天<sup>(十九)</sup>。萬物〔不〕〔無可〕收〔得〕<sup>(二十)</sup>、〔則〕國家〔為其〕貧極<sup>(二十一)</sup>、食不重味、宗廟飢渴、〔得〕天下愁苦<sup>(二十二)</sup>、人民更相殘賊、君臣更相欺〔殆〕〔詒〕<sup>(二十三)</sup>、外內殊辭。咎正〔始〕起於此<sup>(二十四)</sup>。大害之根<sup>(二十五)</sup>、〔而〕危亡之路也<sup>(二十六)</sup>。

〔校勘〕二

- (一) 經は「天下萬物」の前に「雖欲名之為常平、而内亂何從而得清其治哉。子今問之、欲深知其審乎。天地之性」という一文あり。
- (二) 【天下萬物】經は「萬物」に作る。
- (三) 【萬物俱愛陰陽之氣】經は「萬物雖俱受陰陽之氣」に作る。〔經に從う〕
- (四) 【比若莫不能】經は「比若魚不能無水」に作る。〔經に從う〕
- (五) 【遊】經は「游於」に作る。〔經に從う〕
- (六) 【不限】經は「無有」に作る。〔經に從う〕

- (七) 【去矣】経は「游往」に作る。「経に従う」
- (八) 【上】経は「土」に作る。「経に従う」
- (九) 【受】経は「授」に作る。「経に従う」
- (十) 【宜】経は「所宜」に作る。「経に従う」
- (十一) 【其物】経は「迺其物」に作る。
- (十二) 【國家得富】経は「國家為其得富」に作る。
- (十三) 【食之】経は「而食」に作る。
- (十四) 【無疾苦】経は「無所疾苦」に作る。「経に従う」
- (十五) 【不行而為害】経は「不行為害」に作る。「経に従う」
- (十六) 【相其土地而種植之】経は「卜相其土地而種之」に作る。
- (十七) 【即】経は「則」に作る。「経に従う」
- (十八) 【萬物不竟天年皆壞】経は「萬物不得成竟其天年皆壞」に作る。
- (十九) 【上感皇天】経は「獨上感動皇天」に作る。「経に従う」
- (二〇) 【萬物不收】経は「萬物無可收得」に作る。「経に従う」
- (二十一) 【國家貧極】経は「則國家為其貧極」に作る。
- (二十二) 【天下愁苦】経は「得天下愁苦」に作る。
- (二十三) 【殆】経は「詒」に作る。
- (二十四) 【咎正起於此】経は「咎正始起於此」に作る。「経に従う」
- (二十五) 経は「大害之根」の前に「是者尚但萬物不得其所、何況人哉。天下不能相治正、正由此也。此者」という一文あり。
- (二十六) 【危亡之路也】経は「而危亡之路也」に作る。

## 〔訓読〕二

たとえば 天下の萬物、各自に宜有り。當に其の長ずる所、能く為す所、能く為さざる所を任すべくして、強いるべからざるなり。萬物は俱に陰陽の氣を受くると雖も、

たと 比い魚の水無くして高山の上に遊ぶこと能わず、其の水有るに及び、高下有る無くして、皆能く游往し、大木の土無くして江海の中に生ずること能わざるが若し。是を以て古は聖人・明王の事を授くるや、五土各おの其の宜しき所を取り、其の物好き且つ善きを得て、各おの暢茂す。國家、富を得て、宗廟をして味を重ねて之を食せしめ、天下、安平にして疾苦する所無く、惡氣休止して害を為すことを行わず。如い人の其の土地を相らずして之を種植すれば、則ち萬物、天年を竟わらず皆壞るるがごとし。冤結びて解かず、因りて天終し、獨り上に皇天を感動するのみ。萬物收得すべき無くんば、則ち國家、貧極まり、食、味を重ねず、宗廟、

為さず

飢渴し、天下、愁苦して、人民、更こもごも相い殘賊し、君臣、更こもごも相い欺殆し、

外内、辭殊なれり。咎、正に此より始起はじむ。大害の根、危亡の路なり

〔現代語訳〕二

ふさわしいありかた

を任せるべきであつて

五土はそれぞれにふさわしいことを得て、万物もよい状態になる。

なくなるようなものだ

天下の万物にはそれぞれに応じた程度がある。その長所、できること、できないことを(そのまま)任せるべきであつて、無理やりやらせてはいけない。万物はともに陰陽の気を受けていると言つても、例えば魚に水がないと高い山の上には泳げず、水があると高低は関係なく、どこでも泳げるように、また大木には土がないと大河や海に生えることができないようなものだ。だから古は、聖人・明王が仕事を授ける際に、五土それぞれの良いところを取り、物は良いことを得て、それぞれ生い茂つていくのだ。国は豊かさを得て、宗廟(の祭祀)に(供物としての)料理を数多く(贅沢に)出して(祖霊を)供養すれば、天下は安らかなり病と苦しみが無くなり、悪い気(の動き)が止まって害を与えることをしない。例えば人がその土地を見ず(選定せず)にものを植えたら、(植えられた)物がすべて天から受けた寿命を全うことができず、すべて壊滅してしまうようなものだ。恨みができて解消しないことによつて早死し、ただ皇天を震撼させるだけだ。万物がなにも収得できなかったら、国の貧しさが極点に至り、食事に(僅か)一種類の料理しか出せず、宗廟(への供物が少なくなり祖霊)が飢え、天下が愁い苦しみ、民が互いに傷付けあい、君臣が互いに欺きあい、内外の言葉が一致しなくなつてしまふ。その過失は外ならぬここから始まるのだ。(これは)甚大なる災害の根本でもあり、危うい滅亡に導く道でもある。

上下外内  
四境

飢渴し

感動させる→訴える  
(刺激する)

怨みを懐き、

〔注釈〕二  
○陰陽之氣

「太平經聖君秘旨」所引『太平經』佚文

夫人本生混沌之氣、氣生精、精生神、神生明。本於陰陽之氣、氣轉爲精、精轉爲神、神轉爲明。欲壽者當守氣而合神、精不去其形、念此三合以爲一、久即彬彬自見、身中形漸輕、精益明、光益精、心中大安、欣然若喜、太平氣應矣。脩其内、反應於外。内以致壽、外以致理。非用筋力、自然而致太平矣。

○授事

『漢書』卷二四「食貨志」

聖王量能授事、四民陳力受職、故朝亡廢官、邑亡敖民、地亡曠土。

公羊傳僖公26年  
乞師者何、卑辭也、曷為以外内同若辭  
左傳昭公傳三十二年、春、王正月、公在乾侯、言不能外内、又不能用其人也。

○五土

『後漢書』卷二「明帝紀」

今五土之宜，返其正色。（李賢）注：周禮曰，山林、川澤、丘陵、墳衍、原隰，謂之五土也。色謂其黃、白、青、黑之類。孔安國曰，水所去，土復其性也。

『周禮』「大司徒」

大司徒之職，掌建邦之土地之圖，與其人民之數，以佐王安擾邦國。以天下土地之圖，周知九州之地域廣輪之數。辨其山林、川澤、丘陵、墳衍、原隰之名物，而辨其邦國都鄙之數，制其畿疆而溝封之，設其社稷之壇而樹之田主。各以其野之所宜木，遂以名其社與其野。以土會之灋，辨五地之物生。一曰山林，其動物宜毛物，其植物宜早物，其民毛而方。二曰川澤，其動物宜鱗物，其植物宜膏物，其民黑而津。三曰丘陵，其動物宜羽物，其植物宜覈物，其民專而長。四曰墳衍，其動物宜介物，其植物宜莢物，其民皙而瘠。五曰原隰，其動物宜羸物，其植物宜叢物，其民豐肉而庠。

○重味

『史記』卷四一「越王句踐世家」

吳王將伐齊。子胥諫曰，未可。臣聞句踐食不重味，與百姓同苦樂。此人不死，必為國患。

『文子』「上仁」

國有飢者，食不重味，民有寒者，冬不被裘，與民同苦樂，即天下無哀民。

○天年

『太平經鈔』戊部

古賢聖人之法，樂人為善，使不相賊傷，欲令各終天年，還反其道，防絕其本，得睹太平之氣也。

○獨上感動皇天

『太平經鈔』癸部

故瑞應反從人胸中來。故有可欲為，皆見瑞應，何有不來者乎。夫至誠乃感皇天，陰陽為之移動，誰往為動者乎。身形不能往動也。動也者，冥乃心中，至誠感天也。

◎附錄

『太平經合校』太平經卷五十四使能無爭訟法第八十一

「吾所問積多，見天師言，事快而無已，其問無足時，復謹乞一兩言。」「平行。」  
「今吾願欲得天地陰陽人民跂行萬物凡事之心意，常使其喜善無已，日遊而無職無事，其身各自正，不復轉相愁苦，更相過責，豈可得聞乎哉？」「子今且言，何一

絕快殊異；可問者，何一好善無雙也。然，若子所問，猶當順事，各得其心，而因其材能所及，無敢反強其所不能爲也。如是即各得其所欲，各得其欲，則無有相愁苦者也，即各得其心意矣，可謂遊而無職事矣。〈起〉天地之間，常悉使非其能，強作其所不及，而難其所不能，時睹於其不能爲，不能言，不憐而教之，反就責之，使其冤結，多忿爭訟，民愁苦困窮。即仰而呼皇天，誠冤誠冤，氣感動六方。故致災變紛紛，畜積非一，不可卒除，爲害甚甚，是即失天下之人心意矣。終反無成功，變怪不絕，太平之氣，何從得來哉，故不能致太平也，咎正在此。」〈止〉「雖欲名之爲常平，而內亂何從而得清其治哉？」「子今問之，欲深知其審乎！天地之性，〈起〉萬物各自有宜。當任其所長，所能爲，所不能爲者，而不可強也；萬物雖俱受陰陽之氣，比若魚不能無水，游於高山之上，及其有水，無有高下，皆能游往；大木不能無土，生於江海之中。是以古者聖人明王之授事也，五土各取其所宜，迺其物得好且善，而各暢茂，國家爲其得富，令宗廟重味而食，天下安平，無所疾苦，惡氣休止，不行爲害。如人不卜相其土地而種之，則萬物不得成竟其天年，皆懷冤結不解；因而天終，獨上感動皇天，萬物無可收得，則國家爲其貧極，食不重味，宗廟飢渴，得天下愁苦，人民更相殘賊，君臣更相欺詒，外內殊辭，咎正始起於此。是者尚但萬物不得其所，何況人哉？天下不能相治正，正由此也。此者，大害之根，而危亡之路也。〈止〉」